

# 公開講演会 国内奨学応募生のお話を聞く会 ①

## 比較してみる江戸の戯作

### — 種彦と馬琴と『耳食録』 —

日 時：2021年10月16日（土）13:00-15:00

開催形式：対面（10名）+Zoom（50名） 事前申込制

新型コロナウイルスの感染状況によっては、Zoom開催のみ

対面会場：（一社）大学女性協会 本部会議室

新宿区左門町11-6 パトリシア信濃町テラス 101

（JR信濃町から徒歩約7分、地下鉄四谷3丁目から徒歩約3分）

講 師：高柳知代美 さん

2019年度（一社）大学女性協会 国内奨学生候補

関東学院大学文学研究科比較日本文化専攻博士後期課程

申込方法：Google フォーム <https://forms.gle/UA8ficQ9sEFxeEKUA>

または、Email [jauwkanagawashibu@yahoo.co.jp](mailto:jauwkanagawashibu@yahoo.co.jp)

（一社）大学女性協会神奈川支部

締 切：10月9日（土）



### 発表概要

江戸時代の作品には、中国小説の趣向を取り入れたものが多くあります。今回は江戸後期の戯作者、柳亭種彦の合巻『ごうかん かんたんしよこくものがたり邯鄲諸国物語』の「近江の巻」を、典拠である中国小説『じしょくろく耳食録』と比較して、種彦の翻案手法を見ていきます。また、あわせて曲亭馬琴の読本『よみほん まつら さよひめせきこんろく松浦佐用媛石魂録』もとりあげます。種彦と馬琴、実は『耳食録』の同じ話を翻案していました。典拠との相違点、二人の翻案のつながりなど、作品本文を具体的に示しながらお話しします。

**柳亭種彦**：(1783.6.11～1842.8.24.)

江戸時代後期の戯作者。長編合巻『しんしゆ修紫田舎源氏』などで知られる。通称は彦四郎、別号に足薪翁、木卯、修紫楼。『浮世形六枚屏風』は1847年のドイツ語訳を皮切りに英伊仏訳が出版され、欧米で翻訳された最初期の日本文学と言われる。食禄200俵の旗本、14歳のとき、家督を継ぎ、高屋彦四郎知久を名乗った。(Wikipediaより)

**曲亭馬琴**：(1767.7.4～1848.12.1.)

江戸時代後期の読本作者。本名は滝沢興邦、後に解（とく）。号に著作堂主人など。代表作は『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』。ほとんど原稿料のみで生計を営むことのできた日本で最初の著述家。旗本・松平信成の用人・滝沢運兵衛興義の子。「滝沢馬琴」は誤表記、と近世文学研究者からは批判されている。(Wikipediaより)

## 奮ってご参加ください

今年度も神奈川支部への国内奨学生応募者からご研究についてお話をさせていただく機会を設けました。次回は12月に、同じく2019年度の国内奨学生応募者の勝田奈那さんからバイオサイエンスのお話をさせていただく予定です。近くなりましたら改めてご案内いたします。